

総合教育研究センター

学生向け情報誌

クレードル

第14号

CRADLE

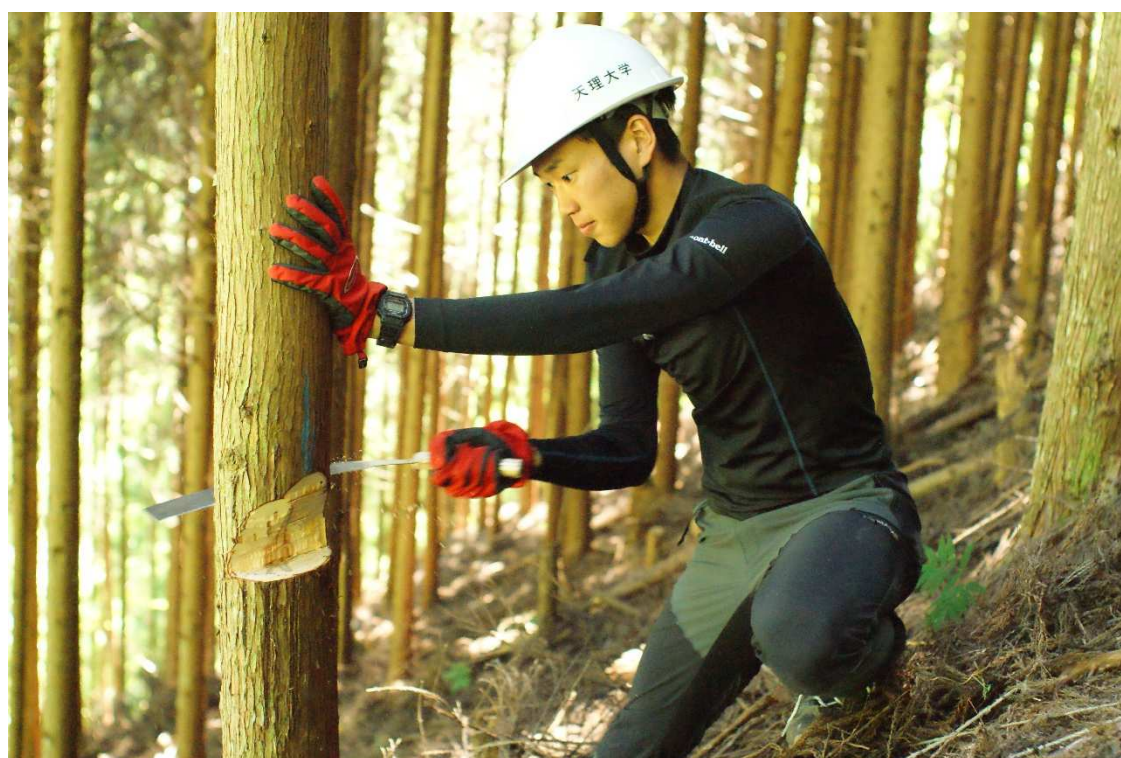
Center for Research And Development of Liberal arts
Education

14th issue

2018年 森 合宿

毎年8月に4泊5日で行っている、吉野での林業実習「森に生きる」が今年も行われました。昨年は実習期間に台風が来たため2泊3日の短縮版となってしまいましたが、今年は天候に恵まれすべての予定が順調にこなせました。参加者は1名のリピーターを除いて初参加者が占め、7名のうち5名が1年次生という、フレッシュな顔ぶれになりました。参加者の感想を中心に、次ページから今年の実習報告をします。

(構成 総合教育研究センター 伊藤義之)



CRADLE(クレードル) 第14号 2018年10月発行

発行者 伊藤義之 天理大学 人間学部 総合教育研究センター

〒632-8510 奈良県天理市杣之内町 1050

電話・FAX 0743-63-7092 (内線) 6111

2018森 実習報告 p. 1

**挫折から一步を
踏み出す心理学** p. 4

基礎ゼミ SA 導入レポート p. 5

心の健康法 12 p. 8

◆森の参加者（敬称略）

◎学生

今里 みやの	(国際学部外国語学科英米語専攻 3 年次)
卜部 久瑠美	(国際学部外国語学科英米語専攻 3 年次)
松崎 俊史	(文学部歴史文化学科考古学・民俗学専攻 1 年次)
山本 奈央	(文学部歴史文化学科考古学・民俗学専攻 1 年次)
上西 泰雅	(体育学部体育学科 1 年次)
梶井 貴弘	(体育学部体育学科 1 年次)
金田 魁人	(体育学部体育学科 1 年次)

◎引率教員（総合教育研究センター）

伊藤 義之 曾山 典子 関本 克良

◎指導員

水本 茂	(宿舎・実習林所有者)
泉谷 吉昭	(林業従事者)
梶本 修造	(林業従事者)
岡本 匡由	(森に生きるOB)

◆森の作業（間伐・遊歩道作り）



道作りをした。

梶井貴弘 大変だったのは階段作り。皮はがし係、木を切る係、杭に加工する係、階段を作る係に分かれた。久瑠美さんと階段を作ったが、かなりハードな作業だった。

上西泰雅 木を切る時の僕の持ち場は、ナタやオノで木に切れこみをいれた後に木をはがす作業です。横から入れるのではなく、縦から入れるイメージですとうまくいくことがわかった。

今里みやの 今日の間伐作業にはカジモトさんが来て下さり、沢山の事を細かく教えて頂きました。3種類のヒモの結び方、林業のあり方を教えていただきました。

松崎俊史 本日の作業は遊歩道作りで、今までのただ木を切り倒すのとは違い杭をはじめ必要な道具を倒した木から加工し、階段をつくった。遊歩



◆森の生活（役割分担・共同生活）

卜部久瑠美 駐車場から宿まで5日間使う布団をわっせわっせと運んだ。私にとってはかなり重労働だったが、男勢は軽々と

運んでくれていて頼もしかった！

金田魁人 川遊びはめっちゃつめたかった！！でも、みんなで楽しめたし、明日の作業も川遊びを楽しみに頑張りたいと思います。

山本奈央 カメラ係りとしていろいろな写真を撮ったが人を被写体にするとうるさくもぼやけたり光の反射で白くなってしまう。

梶井貴弘 夕方からはお風呂を炊いた。風呂を薪で炊くのは初めてだったが、すごく楽しかった。最高の湯かげんであった。

上西泰雅 薪割を初めてしたけど、何等分かにうまく割れたので楽しかった。薪割りはこれからも率先してやっていきたいと思った。



金田魁人 夜は花火をしてとても楽しい思い出になりました。「2018」が書けたのはめっちゃ嬉しかったなあ。

山本奈央 小さいころにおばあちゃんの家に行った時と同じようにまきわりや湯をわかすのをしてなつかしくて楽しかった。

金田魁人 夜はBBQで、高い肉を腹いっぱい食べることができました。BBQをするなんて数年ぶりで、とても楽しむことができました。ここに来て4日目、火をおこすのもずいぶん慣れたように思います。

◆森の感想（反省したこと・学んだこと）

梶井貴弘 林業の楽しさ、厳しさどちらも学べた。たのしいだけでなく、やはり体力的にしんどいこともあり辛い時もあったが、メンバーと一緒にがんばれて成長できた部分が多くあった。

上西泰雅 参加者が少ないことから、1人1人が何をすべきなのか、次にすることは何かなど考える力も身につくと思うので、これは、これからの生活に活かしていこうと思った。

ト部久瑠美 森に生きるに参加して、普段の学生生活では学べないことを、沢山学ぶことができました。林業のおもしろさ、大変さ、そして地球の大きさ、自然の力を知りました。大自然に囲まれて生活すると、自分の悩み事はほんとにちっぽけな悩み事だと思いました。森から沢山学び、リフレッシュもできました。



今里みやの 今回参加して、自然の偉大さを改めて感じました。私たちが何気なく過ごす中でも、自然に危険をおよぼしている場合もありますし、逆に守る事もできると考えると、これから生きていく私たちが自然を守るためにできること、やっていくことをしっかり考えて行動に移していきたいと思いました。

松崎俊史 今日は「森に生きる」最終日で、朝はそうめんを食べ涼をとり、その後各自の片付けと共に宿を出立した。目的地は源流館で、そこでは川上村の様々な生態、歴史、文化、そしてそれらを内包する自然について知ることができた。ただ木を切り倒して、遊歩道を作っていくだけが自然に貢献するものではないことも。

「挫折から 一歩を踏み出す心理学」



神戸学院大学心理学部 講師

中村珍晴 氏

平成30年12月3日(月) 16:30~18:00
天理大学杣之内キャンパス 2号棟 4階 24B 教室

講演者プロフィール

中村 珍晴 (なかむら たかはる)

1988年 愛知県名古屋生まれ。

2007年4月 天理大学体育学部入学、アメリカンフットボール部入部。同年9月試合中の事故により頸椎を負傷。

手術は成功したが、後遺症のため車椅子での生活を送ることになる。

2010年4月 天理大学へ復学。

2012年1月~2015年12月 同アメリカンフットボール部のヘッドコーチを務める。

2014年 天理大学体育学部卒業後、大阪体育大学大学院スポーツ科学研究科博士前期課程へ進学。

同課程を修了(スポーツ心理学専攻)、同大学院博士後期課程に進学。同時に日本学術振興会特別研究員(DC2)を務める。

2018年4月より神戸学院大学心理学部専任講師、現在に至る

主な研究分野: スポーツ心理学(心的外傷後成長、スポーツメンタルトレーニングなど)



基礎ゼミ SA 導入レポート

総合教育研究センター長 伊藤義之

総合教育研究センター積年の念願だった基礎ゼミナール SA（学生アシスタント）導入が決定し、今年度テストケースとして4クラスに SA を採用した。SA 導入に関する報告をする。

1. SA の業務

◎教員補助業務

- ・教材資料の印刷・運搬・配付
- ・PC・AV機器／スクリーンの準備・WebClass の投影
- ・出欠チェック
- ・テキスト忘れ学生への対応(分室への案内)・貸出テキスト返却確認
- ・課題用紙の配布・回収・返却

◎学生学習補助業務

- ・学生の課題作成サポート
- ・質問への対応
- ・授業チェックシート記入
- ・SA オフィスアワー（受講学生との交流や教員に委託された授業準備作業等）

◎特別作業

- ・図書館ツアーの出欠確認・引率
- ・授業評価アンケートの説明、回答補助

実際にはこれらすべてを行うのではなく、この中から担当教員が必要と思ったことをやり、また、ここに書かれていないことも教員の裁量で行った。

2. 2018 年度の SA 配置クラス（曜日時限・クラス・担当者）

月 2（英米 4・伊藤）、火 1（韓西伯 2・田中）、水 2（社福 1・曾山）（社福 2・箱田）

3. SA 担当回数

平均 13 回（4 月第 1 週と最終週（おちばがえり期間）を除いたため）

4. SA 採用条件

学科：担当クラスと同じ学科・専攻の学生（必ずしも実現せず）

成績：基礎ゼミの成績が A 以上、GPA2.8 以上 等

5. SA 研修

4 月初旬に「SA チェックシート」の項目に沿って行う

6. SA チェックシート

日付	年 月 日		
クラス	(先生)		
SA所属	学部	学科	専攻
SA氏名			
本日の課題	返却		
	配布		
	回収		
本日の業務 (行った業務に○)	課題準備 出欠点呼 課題返却 課題配布 課題回収 学生の質問への回答 学生の課題作成補助	WebClass補助 その他	[]
本日の感想・反省点 気づいたこと 気になったこと等			

7. SA の感想 (SA チェックシートに書かれた感想に基づく)

- ・「パソコンを使うことが増えてきたので、パソコンに関する質問が増えてきた」(6月半ば)
- ・「先生用のパソコン(CHIeruのCaLabo LX)の使い方をもっと学ばなければと思った」
- ・「今まで大学内で経験したことや情報を後輩に発信できるチャンスになった」

(国際参加プロジェクトやふるさと会派遣でアメリカに行ったSAの感想)

- ・「授業前や授業中に、先生には話しにくいことを巡回中のSAに話してくれた」

8. 今後に向けて

今年度のSAは担当教員が使い切れていないところもあり、チェックシートの感想を見てみるとやや時間をもてあますところもあったようだが、私自身はSAの導入がとても役に立ったと感じた。毎週のように課す、課題の配布・回収・返却などだけでも授業の初めにずいぶん時間を費やされるが、それをすべてSAに任せてしまうことが出来、また、テキスト忘れの学生を教育研究支援部分室に連れて行ったり、コンピュータのトラブルを分室に届けてもらったりという、一見些末なことがらをSAに任せてしまうと本来の授業にかけられる時間が違う。

もちろん本来の、学生と教師の間をつなぐ存在としての仕事がSAとしてもっとも重要な役割です。ただ間に入ってくれと言っても何をしたいか戸惑うこともあると考え、例えばノートテイキングの授業のときにSAに自分の経験をプレゼンテーションしてもらい、それをノートテイクしてもらったりした。これによって学生はSAを身近に感じ、その後の良好な関係にもつながったようだ。私のクラスを担当したSAは「キャンパスで基礎ゼミのクラスの下級生に声をかけられた」と喜んでいました。

来年度からは基礎ゼミが原則として自学科・専攻の教員担当となる。そこに自学科・専攻のSAを配すれば、教員・新入生の両方にメリットが大きいのではないかと。来年度も総合教育研究センターでは担当するクラスにはSAを配置する予定だが、それ以外の各学科・専攻でもSAの導入を検討してはどうか。

心の健康法 12

進んで、下がって、また進みましょう。

総合教育研究センター 臨床心理士 仲 淳

みなさんの最近の調子はどうですか？グイグイいい感じな毎日の人、まあまあふつうな毎日の人、ちょっとピンチな毎日の人。。。いろんな調子の人がいるでしょう。できればいつもイケイケハッピーな日々が過ごせればいいものなのですが、実際のわたしたちの生活は、なかなかそうはいきません。すごくスイスイ行けていいなあ、と思っていたら、突然、無理難題が降りかかってきたり、さっきまであんなに晴れていたのに、急に雲がモクモクとわいてきて土砂降り、みたいなことが、すごくよくありますよね。

ちょっと前より進んだかな？と思ったら、押し戻され、またがんばって前より進んだかな？と思ったら、押し戻され。。。その繰り返し。。。

「人生、明るく元気にポジティブ一直線！」でいけたらどんなにいいものかと思うのですが、本当にそうはならないですよね。。。(涙)

ただ、40歳を過ぎて筆者が思うようになったのは、仕事をしたりなにかをしたりというのは、どうやらそういうものなのかもしれない、ということです。

人は高くジャンプするためには一旦ヒザを曲げて姿勢を低くしなければなりません。苦しい時、押しつぶされそうになってもがくときというのは、いつか来るかもしれない跳躍のときのためのタメの時期なのかもしれないなあ、と。

上に行けないスランプは、見えない地下に根が生える、備えの時期なのかもしれません。じっくりジワジワ根を張って(ねばってねばって)、新しい芽が出るときを待ってみましょう！

